

生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)を終えて

COP10の成果と今後の展望

10月に開催されたCOP10は、最終日まで議論の行方が不透明でしたが、30日未明、遺伝資源へのアクセスと利益配分(ABS)に関する名古屋議定書や、2011年以降の新戦略計画(愛知目標)を含む決議案が次々と採択され、参加国からも高い評価を得ることができました。



会議終了時の様子

これは、単に交渉担当者たちが凄腕だったからというだけではなく、会議全体の運営・雰囲気づくりに関わられた様々な人々の努力のたまものといえます。

長いようで短かったCOP10が終わった次の瞬間から、議論され取り決められたことを実行に移さなければ意味がありません。

まず、名古屋議定書の批准や、愛知目標の実現に向けて取り組むことが第一ですが、ここでは中部地方でいかに行動すべきか、そのポイントのみ触れます。

まず中部地方環境事務所が平成21年度にとりまとめた、「生物多様性を支える市民・地域による戦略的地域づくりビジョン」がヒントになります。このビジョンは伊勢・三河湾流域(海域も含む)を対象としており、課題解決の空間的な広がりとして「流域」を取り上げました。例えば、矢作川流域では以前から流域圏を意識した活動が続けられていますが、多様な主体が流域をよりどころとして、地域住民からのアプローチを前提としつつ、より一層緊密に連携・協働することが重要です。

森・里・川・海において生活してきた人々の暮らしの中で培われた知恵を見直し、その知恵を活用して生物多様性を賢明に利用する。日本の生物多様性は、人が自然に働きかける中で形づくられてきたことを忘れてはいけません。

しかし、現在の私たちの身近な食料や身の回りのものを見ると、流域を越えて、全国、世界各国から運ばれてきているものがほとんどです。より環境負荷を小さく、持続可能な社会を実現するために、流域を基本としつつ、森林環境税といった経済手法を使うなど生物多様性をできる限り保全するよう努め、明るい未来にしたいものです。

詳しくは

http://chubu.env.go.jp/to_2010/0518b.html

生物多様性交流フェア

COP10の会場である名古屋国際会議場の南側の白鳥公園を中心として、生物多様性交流フェアが開催されました。

全部で200を超える各国政府、国際機関、国内外のNGO、企業、学術団体や自治体などがブースを出展し、生物多様性に関する取り組みなどを発信した他、シンポジウムや有名人によるトークショーなども開催されました。期間中は11万8000人を超える人が来場し、一般市民と出展者との交流が図られました。



生物多様性交流フェア

環境省ブースでは、床や壁を地元愛知県のスギの間伐材で仕上げ、日本の生物多様性の現状と取り組みについて、パネルや剥製などで展示した他、全国のレンジャーが国立公園や野



環境省ブース外観

生生物の保護管理について解説するワークショップを開催し、多くの方が耳を傾けました。

また、中部地方環境事務所のコーナーも設けられ、生物多様性を支える市民・地域による戦略的地域づくりビジョンの実践に関するパネルなどを週替わりで展示し、地域の取り組みを全国、そして世界に発信することができました。



環境省ブース展示



レンジャーによるワークショップ



NGOの動き

地元の市民は生物多様性条約COP10にどのように向き合い、対応したか。

生物多様性の保全に欠かせない、地域の取り組み。COP10開催地の愛知県名古屋市を取り巻く伊勢・三河湾流域で、多くの団体や個人の地道な活動が、COP10に向けてさらに活性化し、議論を重ね、協働することに努めてきました。

例えば、COP10では、全国組織である生物多様性条約市民ネットワーク(CBD市民ネット)が、世界のNGOと作り上げたNGO-CSO¹声明を本会議で発表し、意欲的な新戦略計画の採択を強く訴え、それに基づく行動宣言に700名以上の賛同署名を集めました。このCBD市民ネットには、伊勢・三河湾流域から多数の市民団体や個人が参画しており、地元を活動拠点とした生命流域作業部会やジェンダー・マイノリティー作業部会が、生物多様性の損失や、その原因ともなり得る地域・社会の問題を取り上げ、シンポジウムやエクスカージョンなどの普及啓発活動に



生物多様性交流フェアのフォーラムで伊勢・三河湾流域における各地域の問題を紹介



生物多様性交流フェアブースの様子

取り組んできました。また、これまでに積み重ねた調査や対話の結果を踏まえ、生物多様性の重要性を強く訴え、COP10期間中には多数のブース出展やフォーラムの実施のみならず、世界に対する開催地住民からのメッセージや、提言も発信し、多くの成果を残すことができました。

今後は、COP10を機会に交流を深めた地域住民が中心となり、行政や企業など、異なるセクターとともに、生物多様性の保全に向けて協働・活動を更に強化していくことが期待されます。

¹CSO(Civil Society Organization)・・・市民社会組織

サイドイベント&関連行事の様子

条約を扱う作業部会とは別に、日本の省庁を始め、国連機関、各国の団体により、それぞれ生物多様性に関わるテーマでサイドイベントが開催されました。

国際会議場内に準備された会議室で、それぞれ同時進行で10~15団体ずつ、昼食後(13:15-14:45)、夕方(16:30-18:00)、(18:15-19:45)に分かれて行われました。つまり、一日で40ほどのサイドイベントが行われていたことになります。13時からのイベントでは、昼食を出すイベントも多く、多忙で昼食が取れない出席者への配慮がなされていました。

また、関連行事の一つとして開催された里山知事サミットでは、来賓としてアフメド・ジョグラフィ氏を迎え、各県の取り組み発表や里山・里海のパネルディスカッションが行われました。また、世界レンジャー会議では、各国の国立公園の生物多様性保全の取り組みについて、対話を通してその経験が共有されました。

サイドイベント、関連行事はともに、世界の環境活動の経験を共有し、多角的に意見交換のできる有意義な機会となりました。

エクスカージョン

藤前干潟

渡り鳥にとって重要な飛来地であることから国指定鳥獣保護区、さらにはラムサール条約にも登録されている藤前干潟にて、10月23日(土)、COP10の公式エクスカージョンが行われました。世界中の国々から26名の方々に参加されました。

まずは稲永ビジターセンターにて藤前干潟を紹介するDVDを視聴。この時点で多くの質問が出て、参加者の関心の高さを実感しました。続いて保全の経緯についてNPO法人藤前干潟を守る会からレクチャー。近くのヨシ原での現地説明では、庄内川河川事務所による治水の説明と生き物観察を行いました。皆さんとても熱心に聞いておられました。ビジターセンターに戻った後、館内の展示説明と隣の名古屋市野鳥観察館で野鳥観察をしました。



ヨシ原での生き物観察の様子

当日は心地の良い秋晴れ。かなりタイトなスケジュールでしたが、忙しい交渉の合間で、とても中身の濃いひとときを過ごせたのではないのでしょうか。

伊勢志摩国立公園

伊勢志摩国立公園で行われた公式エクスカージョンには、11ヶ国から25名が参加しました。一行は初めに鳥羽市にある「海の博物館」を訪れ、伊勢志摩の漁業文化に触れるとともに、沿岸部のアマモ場で多くの魚類を採取し、伊勢湾の生命の豊かさを実感していました。続いて訪れた神宮では、神域



シーカヤックを楽しむ参加者

の大木に驚きながら、神宮特有の持続可能な森林管理方法に真剣に耳を傾けていました。宿泊先の合歓の郷Hotel & Resortでは、敷地内で丁寧に管理されている里地里山を散策し、生息する植物や昆虫などを観察していました。

2日目は横山展望台から英虞湾の絶景を楽しみながら、三重県水産研究所や志摩市が取り組む英虞湾再生について話を聴き、その後はシーカヤックで湾内を海上散歩。皆、大はしゃぎで楽しんでいました。そして最後には海女小屋で地元の海女さんから漁の話を楽しみながら採れたての新鮮魚介を食べ、大満足の様子でした。

古くから漁業を中心として栄え、神宮をはじめとする日本の歴史・伝統・文化が根付き、今なお多くの人々が自然とともに暮らす伊勢志摩ならではの、自然と人間の共生を紹介するツアーとなりました。



里山知事サミット



サイドイベントの様子